

令和2年度 鳥取県立農業大学校評価システムシート (第2回)

ミッション	次代の農業を担い、指導的役割を果たす人材の育成・確保
重点目標	○学生・研修生の円滑な就農の支援 (個別指導の強化及び関係機関との連携による自営就農及び雇用就農の支援強化) ○ GLOBAL G.A.P.の実践と日本梨の認証継続と白ネギの新規認証取得

評価基準 (達成度)

- A 100%以上達成
- B 80~99%達成
- C 60~79%達成
- D 40~59%達成
- E 39%以下の達成

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
1	学生・研修生の確保	1 農業大学校の魅力発信	1 養成課程入学生数は平成23年度以降、定員割れが続いている。 ・入学者の出願のきっかけに「HPを見て」の声が多いため、その充実が必要である。 <入学者数の推移> H27:23名、H28:21名、H29:22名、H30:24名、H31:24名、R2:22名	1 入学者数 定員30名確保	1 ・オープンキャンパス(2回)の開催、学校ホームページの更新による魅力発信 ・高等学校進路指導研究会への参加および県内高校訪問(全校) ・各高校で実施される進路ガイダンスへの参加 ・高校生の職業観の醸成と農業分野への進路選択の機会提供 ・学校訪問の受入れ(随時)	1 ・オープンキャンパスを7月に開催し36名が参加(うち県内出身者32名、3年生25名、入学予定者15名)。2回目は新型コロナの影響で中止。 ・学校HPにおいて専攻実習の活動や学生の日常生活等について、その都度積極的に紹介するなど更新を随時行い、情報の公開に努めた。 ・県内の全高校を訪問し、農業大学校の説明を行った。入学志願者の情報収集を行うとともに、学校PRを行った。 ・例年であれば県内農業系高校の上級学校訪問を受け入れ、学校説明を積極的に行うところであるが、学生寮を運営する管理者として、新型コロナウイルス感染防止の観点から今年の受け入れは断念した。 ・5高校の進路ガイダンス(今後の予定も含む)に参加し、学校説明を行った。 <令和3年度入学予定者30名>	A	新年度に向けてオープンキャンパス等の各種行事を予定通り開催できるように、感染症予防対策を含めて、事前に準備を進めていく。	・県外からの入学が多くなっていると聞く。卒業後の進路についても学生の意向を考えて対応してほしい。
		2 農業高校との連携による学生確保	2 ・農業高校3校(智頭農林、鳥取湖陵、倉吉農業)の農業クラブをオープンキャンパス時に受入れ、3校出身の本学生との交流会を行っている。 <年次別参加者> H26:11名、H27:13名、H28:12名、H29:10名、H30:12名 ・スーパー農林水産業士を志向する生徒の食の6次産業化プロデューサー育成講座への受入を行っている。 <年次別受講者数> H29:52名、H30:39名、R1:46名		2 ・オープンキャンパスと農業高校の農業クラブの同時開催による先輩学生との交流 ・農高・農大一貫プロジェクトの検討(新規) ・スーパー農林水産業士に係る食プロ育成講座受講受入れ ・農業教育研究会(教育委員会)での学校紹介および情報交換	2 ・7月に開催された農業クラブ連盟の「農業後継者の集い」で農業高校3校のクラブ員12名と高校OBの農大生4名との交流会を行い、農高生が農大についての理解を深めた。 ・農業高校との高大連携を進めるために、プロジェクト活動に積極的に取り組んでいる倉吉農業高校と協議を重ね、令和3年度からは各コースで統一したテーマを持ってプロジェクト活動を展開する。特に作物コースはスマート農業で畜産コースは令和4年度に鹿児島で開催される全国和牛共進会に向けて、取り組みを強化していく。 ・スーパー農林水産業士認定要件である「食の6次産業化育成講座」を開催し、15名(3校)が受講した。(レベル1:9名(1校)レベル2:6名(3校)) そのうち1名が令和3年度入学予定(野菜コース)。	A	倉吉農業高校と計画している「高大連携一貫プロジェクト」について、連携を十分にとりながら確実に実施していく。(特に畜産コースと作物コースは重点的に取り組む)	
		3 IJUターン就農者の掘り起こし	3 東京、大阪で開催される移住フェア、新農業人フェアに参加し、就農を目指す一般社会人が事前に進路相談できる機会を提供し、相談に応じている。		3 東京(3回)・大阪(4回)等での就農相談会を通じて就農のための道筋や支援制度の紹介し、就農希望者の掘り起こしを行う。	3 ・新型コロナウイルスのため、就農相談会への参加を中止した。	-		
2	着実な就農	1 求人・求職者情報の就農支援関係機関との共有による就農の促進	1 近年、非農家出身学生が約5割を占める中、農業法人等からも求人が増えており、雇用就農による就農が増えている。 <年次別就農率> H27:61%、H28:70%、H29:67%、H30:59%、R1:76% (5か年平均66.6%)	1 学生の就農率67%	1 ・就農支援関係機関との情報(求人、求職、研修)共有 ・雇用就農相談会による農業法人等求人者および求職者のマッチング ・県内地元就農を目指す学生の就農地農業関係機関との意見交換会の開催	1 ・農業改良普及所、担い手機構等との情報共有を随時実施した。 ・雇用就農相談会を2回開催し(7月、11月)、求人者53事業者、求職者101名(うち農大以外の参加2名)が参加した。それにより2年生、研修生7名の就職が内定し、1年生は自身の就農イメージを具体化することができた。 ・また、今年は新たに日野郡中山間営農ネットワーク協議会と連携し、日野郡にある4つの農業法人等と希望学生7人が面談形式による雇用就農の相談会を10月に実施し、最終的に3人の進路決定につながった。 <学生就農率80%(3/10)> ・親元就農2名、雇用就農後独立就農希望1名について、卒業後の就農がスムーズに進むよう関係機関との顔合わせ、意見交換等を行った。	A	次年度も日野郡中山間営農ネットワーク協議会との連携を強化し、雇用就農につながる相談会を継続して開催する。	

2 研修生に対する的確な進路指導の実施	2 社会人向け研修制度として運営している各種研修制度の趣旨はそれぞれ異なり、研修生の受講目的も様々である。就農実現に向けては、制度ごとに研修生のめざす目標を踏まえつつ、個々の背景やレベルに即した指導及びアドバイス、研修進捗状況をおさえながらタイムリーに関係機関との調整を実施していくことが極めて重要である。	2 ・アグリチャレンジ研修生の就農率：70% ・先進農家実践研修生・スキルアップ研修生のうち自身の経営計画作成率（修了時）：80%	2 各研修において、研修開始時・終了時のみならず、研修期間中の個別面談等を複数回実施しながら、各研修生に適した進路・就農方針に関するアドバイス、必要な関係機関との調整を実施する。	2 ・研修生個々の目指す就農形態が異なるため、個別面談を重ね、支援方針を決定した。また、関係機関と支援方針の共有を図り、連携して就農に向けた支援に取り組んだ。 <評価指標達成状況> ・アグリチャレンジ科の就農率84%。 ・先進農家実践研修、スキルアップ研修修了時の営農計画作成率100%見込み。	A		
---------------------	---	---	---	---	---	--	--

3	学生の総合的経営能力の向上	1 学生個々の状況に応じた個別指導の充実	【養成課程共通】 1 学生の就業意欲や体力、学力は千差万別で、専攻実習での技術習得には個々の能力・スピードに応じたきめ細やかな指導が必要である。		1 各コース毎に「理解度アンケート」を実施し、農業技能や農作業安全に対する知識の習得状況について学生と職員の間で共通認識を図る。学生の苦手分野の克服、作業時間を含むコスト意識を醸成するための指標として活用する。 理解度アンケートの実施（7月、11月の2回）とそれを基にした個別指導（随時）	1 「理解度アンケート」により判定した知識・技能の理解度、習熟度を基に、面談、指導により、技能習熟度が向上した。また、昨年度から理解度アンケートの評価方法を4段階評価に統一している。 ・理解度アンケート実施(7月、12月ほか) (詳細は各コースごとに記載)	-		
		2 計算能力を含めた基礎学力の向上	2 営農技術のなかには、圃場面積の計算、施肥量の決定や農薬の希釈など、計算能力が求められるが正確に計算できる学生が少ない。	2 ・1年生学力補完補講座（合格水準達成率：100%）	2 1年生の基礎学力（計算、単位など）を把握し、学力補完のための補講を行う。また、1・2年生とも専攻実習で、実践的に肥料・農薬計算を実施する。 ・1年生学力補完講座（20回） ・学力テスト（随時） ・専攻実習時の実戦力評価（随時）	2 ・22名中21名の学生に対し学力補完講座を20回実施した。 ＜合格水準達成率＞4%(5/12)→95% ・各コースの農場実習(肥料、農薬、種子等散布)により実践力を磨いている。	B		
		3 幅広い農業知識の習得と販売実習による経営感覚の向上	3 多様化する農業形態の中で営農するために、コースの枠を超えて幅広い知識と技術を身につける必要がある。またモノを作るだけでなく、「売る」ことも意識させることで経営感覚を持った農業者を育成する必要がある。		3 「校内技術競技」を行い、各コースから出題される問題（筆記・実物鑑定）を解きその点数を競う。また校外で「農大市」を実施し、商品PR方法などを学ぶ。対面販売を行うことで消費者ニーズを把握するとともに、接客方法を学び、生産販売に活かす。学生主体で企画、準備、運営を行うことで、就農後の店舗販売や自家農場のPR手法を学ぶ。さらに、農大市来場者にアンケートを実施し、次期開催等に活用する。	3 ・校内技術競技の開催(6/17、11/5) ・1、2年生と一緒に事前勉強するコースも見られ、学習意欲の向上につながっている。 ・農大市において、ポップに工夫をし、商品PRに努めるとともに、普段人見知りの学生も含め積極的に接客した。 ・農大市におけるPR活動に積極的に取り組みようになった。 ・農大市(校内1回：7/9) ・第2回(10/15)と校外については、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため中止した。 ・修農祭(11/19)での販売実習は、上記感染拡大防止のため中止した。 ・各コースにおいて、生産物販売を通して、コストや損益分岐点を計算させ、単価設定をさせた。 ・農大市終了後、反省会を行い、良かった点、改善が必要な点を拾い出し、次回の開催に生かせるようにした。	B	来年度から農大市と修農祭を統合し、修農祭での販売実習に照準を定めて準備を進めていく。	・販売実習の中で店舗で農産物を販売することがあると思うが、ポップの出来があまり良くないように感じた。わかりやすいポップ作成を勉強してほしい。
		4 地域で頑張っている卒業生等を訪問して自己の就業意欲を高める	4 非農家出身の学生割合が高くなってきていることから、地域で頑張っている卒業生等を訪問し、就業意欲を高める必要がある。		4 農家・卒業生等の訪問・視察（各コース2回以上）	4 農家・卒業生等の訪問・視察 合計9回：果樹1、野菜2、花き3、作物2、畜産1 ・学生が具体的な進路や就農のイメージを持つことができるようになった。 ・自分の目指す就農に必要な資格を知り、フォークリフト、小型車両系建設機械運転特別教育等の資格を取得した。	B		
		5 GAPに関する講義の継続及びR2認証の取得	5 近年、農業のグローバル化や食の安全意識が高まっており、生産工程を管理する手法（GAP）の教育が必要となっている。	5 ・GAP認証の継続取得（日本梨）及び新規取得（白ネギ）	5 ・グローバルGAPに特化した講義について1年生を対象に年8回実施 ・各コースで改善取組を行う。 ・この学習の成果目標として、「日本梨」での認証の継続取得及び「白ネギ」での新規認証取得を目標とする。	5 ・GAP普及推進機構から専門家を招き、グローバルGAPの理念から具体的なリスク評価、手順書の作成方法等に至るまで講義・演習・ワークショップを実施した（10/26～1/13、8回）。 ・講義を通じ、当たり前のことができていなかったこと、同じことの繰り返しを怠らず続けることの大切さ、整理整頓の大切さ、表示の大切さなどへの意識が高まった。 ・全コースで整理整頓や掲示（見える化）に取り組んだ。（詳細は各コースに掲載） ・果樹コースの学生を中心に「日本梨」での認証審査を受け、グローバルGAP認証を継続取得した（12月29日付）。 ・野菜コースの学生を中心に「白ネギ」での認証審査を受け、グローバルGAP認証を新規取得した（12月29日付）。	A	新型コロナウイルス感染症の関係で外部講師が来校できないことを想定し、リモート方式での講義の開催方法の検討を行う。 来年度は花きコースでグローバルGAPの新規認証取得を目指しているため、新規認証取得に向け準備を進めていく。	・グローバルGAPに積極的に取り組んでいるが、就農したあともグローバルGAPの考え方が継続されるように工夫してほしい。

4 学生の専攻 営農技術の 向上	【果樹】 1 ほ場管理に係る主体性、責任感の醸成	1 永年作物である果樹の栽培技術を2年間の限られた期間で習得する事は困難である。よって、技術習得を図るためには、学生が主体的に責任感を持ってほ場管理を行わせる必要がある。	1 「1,2年共通」 理解度アンケートではほ場作物の管理等に関する項目について、職員評価で「できる」以上が80%以上 「2年次」 ・作業説明の評価として学習チェックの活用	1 「1,2年共通」 ・1人に1樹の20世紀の担当樹を割り当て、年間を通して栽培管理を行わせる。 ・梨等の栽培管理に関する基礎知識習得のためゼミや小テストを月1回実施 「2年次」 ・各学生の担当樹種を決定する。各樹種の管理作業を行う際は目的、方法を担当の学生が他の学生に説明する。 ・プロジェクト学習の課題設定、進行管理等を徹底させる。	月刊誌「因伯の果樹」のポイント解説の実施や農業技術検定の過去問の勉強会を1~2回/月程度行うことが出来た。 12月の農業技術検定では1年生2名が2級、1名が3級を受験し、受験者は全員合格した。 理解度アンケート 2年 95% 1年 98% 2年生は説明準備、説明、チェックシートによる反省、指導の繰り返しによってコミュニケーション能力、知識の向上を図ることが出来た。この活動はプロジェクトをまとめていく際の作業進行にも役立ったように感じている	A	本年度から新たな取り組みとして、1年生に対して、チャレンジプロジェクトを実施した。グループで担当職員と簡単な課題に取り組むものだが、果樹の技術への興味を抱かせたり、調査方法を習得させるために役立った。来年度も継続して実施させたい。	
	2 新技術、新品種に係る技術習得	2 本校では、新技術、新品種を積極的に導入し、生産体制が整いつつある。これらを活用して生産現場の現状や将来的ニーズに応じた知識・技術の習得を図る	2 学習した新技術について理解度を確認するテストを行い全員が70点以上	2 ・新品種研修会、ジョイント仕立て研修会、現地視察等の参加（4回程度/年）。 ・参加した研修会で学んだ技術を本校の新品種、ジョイント栽培樹等で実際に行い、知識、技術の深化を図る。	視察は、園芸試験場の視察1回にとどまったが、校内のジョイント栽培の管理を通じ、ジョイント栽培の特徴について理解を深めた。2月に卒業生が就農した農業法人を訪問する予定。 ジョイント栽培に関する確認テスト 平均87点 70点以上100%	A	高大連携で、ジョイント栽培について農高を訪問する予定。その際には学生も同行させ、学生が説明できるレベルにしたい 7月に導入されたロボット草刈り機を利用したプロジェクトに取り組む予定	
	3 GLOBALG.A.P.の取り組み	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をおとして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	3 ・リスク改善による適合基準達成割合：100%（認証継続）	3 ・生産工程におけるリスク点検、評価及び改善策について前年の取り組みの改善を図るとともに、新たに追加する事項の有無について学生を主体にしながら検討する。 ・学生に主体性を持って関わらせるため、GAP責任者を設けるとともに効率的な取り組みのためパソコンによる記録を取り入れる。 ・全ての日本梨ほ場及び関連施設で活動実施	書類の読み合わせや改善活動を通じて、GAPの内容の理解とともに農業技術について知識を深めることにもつながった。 これまで、手書きで行っていた作業日誌や農薬使用簿、出荷記録等をパソコン入力に変更に、在庫確認や過去の記録の確認が容易にできるようになった。 12月3、4日の審査により、認証継続が認められた	A	パソコン入力した記録簿を活用し、各圃場の収量や販売量をモニタリングしながら、管理や販売を考えさせるようにしてゆきたい。 GGAPの認証は継続しない予定だが、鳥取農大版GAPの基準作りに取り組みたい	

<p>【野菜】 1 栽培基礎技術の向上とプロジェクト学習による実践力の養成</p>	<p>1 コースの学生15名のうち、農業高校以外の出身者が9名(60%)、また、非農家の学生が14名(93%)を占めており、農業に関する基礎知識及び技術の習得支援が必要である。</p> <p>将来的な独立就農の意向を現段階で8名(53%)の学生が示しており、実習のレベルを個別の就農目的に合わせて充実させることが重要である。</p>	<p>1 ・理解度アンケートで、野菜に関する栽培基礎技術に関する項目について「できている」以上の評点が80%以上とする。</p> <p>・経営計画書作成 1年次：1品目100% 2年次：2品目100% ・農業技術検定 1年次：3級100% 2年次：2級 50%</p>	<p>1 「1年次」 ・1年生2名を1組として、ビニールハウス1棟の管理を行わせる。 ・各自の関心により、一人2品目を選定させ栽培管理を行わせる。 ・鳥取県の主要品目である白ネギ、トンネルスイカは1年生全員で管理を行う。 ・1学期中に主要野菜品目の基礎知識を習得させるため野菜ゼミ及び小テストを行い早期理解を促す。 ・経営の手引きを参考に経営計画書を作成させる。(担当する1品目)</p> <p>「2年次」 ・各自の進路事情合わせたプロジェクト課題に対応した品目を担当させる。 ・ビニールハウス1棟を管理させ、播種から収穫終了までの長期的な管理計画を立てさせる。 ・栽培管理に使用した全資材、労働時間をリストアップさせ、経営計画書(資金繰り計画)の作成を行う。 ・1年生に適切な指示ができるように、2年生は1年生のハウス管理の補佐を行う。</p>	<p>1 「1年」 ・学生全員が最低1棟のビニールハウスで播種から収穫まで肥培管理、施肥、病害虫防除、出荷調製出荷まで責任をもって栽培管理をすることができた。 ・専攻実習の時間に主要野菜品目の栽培方法の学習を行った。技術競技会に合わせて計算等の小テストを実施し理解を深めた。 ・プロジェクト課題の設定に合わせて経営指導の手引きを参考に経営計画を作成中である。 【理解度アンケート66.7%】</p> <p>「2年」 ・プロジェクト課題の計画に基づいて栽培管理し、結果をまとめて発表することができた。肥料農薬資材、労働時間等の記録に基づいてプロジェクトの結果の経営試算を行った。 ・率先して作業を行うことができ、1年生に対して業務の適切な指示を行えるようになった。 【理解度アンケート82.0%】 ・プロジェクト課題に合わせて授業で経営計画を作成した。 ・経営計画書作成 【1年：50% 2年：100%】 ・農業技術検定 【1年：83% 2年：14%】</p>	<p>B</p>	<p>・農作業に慣れていない学生もいることから、1年生の入学から夏までは栽培する品目を絞り、全員で作業しながら基本的な技術を身につけることを重点的に行い、夏以降の栽培でビニールハウス1棟を1人で管理することにしたい。 ・機械操作に不安な学生が多いことから、定期的に機械操作をする時間を作りたい。</p>	<p>・農大のイチゴが直売所で販売されているのを見ることがあるが、荷姿があまりよくないし、単価も値頃感がない。もう少しパッケージ等に工夫をしたほうが良い。ほかの出展者と比べて何が違うのかを見ることが大事。</p>
<p>2 県内先進農家、先進地及び試験場視察</p>	<p>2 野菜コースでは、現地の新技術(管理、品種等)を積極的に導入している。また、産地課題の解決プロジェクトに取り組む学生もいるため、現地の栽培管理状況を理解する必要がある。</p> <p>さらに、現地ではスマート農業の導入が進むことが考えられ、新技術と併せてスマート農業先進農家の状況も理解する必要がある。</p>	<p>2 理解度アンケートで、鳥取県主要品目の現地状況について「理解できる」以上の評点が80%以上。</p>	<p>2 ・鳥取県主要品目を中心に先進地視察を実施する。 想定する品目(白ネギ、ブロッコリー、スイカ、トマト、ミニトマト、ホウレンソウ、イチゴ)</p>	<p>2 ・野菜の育苗：当別当育苗で野菜の育苗管理方法について視察した。 ・イチゴ：園芸試験場で「とっておき」の栽培方法について視察した。 ・先進地の作物の管理状況等を視察し、管理方法の違いや合理的な管理方法について理解を深めることができた。 【理解度アンケート：86%】</p>	<p>B</p>	<p>・コロナの影響で先進地視察の機会が少なかったが、積極的に視察できるようにする。</p>	
<p>3 GAPの取組</p>	<p>3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得を通して、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。</p>	<p>3 ・リスク改善による適合基準達成割合：100%(認証取得) ・理解度アンケートでGAPに関する項目について「理解できる」以上の評点が80%以上</p>	<p>3 ・生産工程におけるリスク点検、評価及び改善策の検討について、学生主体の取組とするため、学生内でグループを作り、役割分担をしながら改善活動を実施する。 ・秋冬ネギ圃場及び関連施設で活動実施</p>	<p>・毎週金曜日午後、GAPの時間を設け、昨年度に作成した手順書に従って整理整頓を継続実施し、全員のGAPに対する理解と農場の改善の習慣化を図った。 ・リスク評価を再度行い改善策を検討し農場全体の管理運営に関する手順書を作成し野菜コース全員が手順書に基づいて行動する体制を作った。 ・秋冬ネギに限らず、他の露地品目、ハウス作物についてもGAPの考え方に従い、衛生管理等が徹底できるようになった。 ・資材等の配置が決まったことで、道具を探す時間が激減した。 ・12月に秋冬ネギでグローバルGAPの審査が行われ認証された。 【認証取得 取得した】 【理解度アンケート 86%】</p>	<p>A</p>	<p>・継続審査に向けて学生が主体的にGAPを推進する体制にする。</p>	

<p>【花き】 1 栽培基礎技術の向上と需要期を意識した栽培管理の習得</p>	<p>1 (1) (2) 近年、非農業高校出身者が多いため、農業の基礎知識等を習得させることが重要となっている。その上で、花き栽培基礎技術の習得を目指し、さらには、新技術や本県に適する新品目について、積極的に学び、検討することにより、栽培技術の向上を図る必要がある。</p>	<p>1 (1) (2) ・理解度アンケートで花きの栽培基礎技術に関する項目で「できている」以上の評価が80%以上。</p>	<p>1 (1) 農業一般の基礎知識等習得支援 農業一般の基礎知識等を習得させるために、ゼミ等の拡充を図る。 ・農業技術検定等の活用 (2) 花き栽培技術等支援 生産面では、学生に担当品目を持たせ、栽培管理を行い、基礎技術の習得、責任感の醸成を図る。また、花き生産では需要期（お盆、彼岸、年末等）に出荷することが重要なため、開花調節技術等を取り入れ、常に出荷時期を意識した栽培管理を行う。 販売面では、消費者に手にとってもらえる出荷物、商品作成を目指し、花束、寄せ植え作成などの体験から、色の併せ方、使用方法、商品PR方法等について学習し、販売方法の改善・提案へと結びつける。 ・長期栽培スケジュール等の作成による作業の確認と作業日誌の記載の徹底 ・プロジェクト活動の進行管理 ・とっとり花回廊での研修 等</p>	<p>1 (1) 農業一般の基礎知識等習得支援 ゼミ等を行い、農業一般知識等の習得に努めた。学生の学習意欲、知識共に徐々に高まってきている（農業技術検定新規取得：2級2名、3級1名） (2) 花き栽培技術等支援 ①生産面 ・学生に複数の品目を担当させたことから、基礎技術の習得、責任感が醸成された。 ・日々の作業日誌等の記帳により、学生の知識等の定着に繋がった。 ・検討会を随時開催するなど、プロジェクト学習の進行管理に努めた結果、プロジェクト学習法が身についた。 ・中長期の栽培スケジュールを学生自らが作成し、キク、ユリ等の主要品目で開花調節技術等を盛り込んだ栽培を行った結果、実際に需要期に出荷・販売ができたことで、学生は需要期を意識した栽培管理ができ、重要性も理解できた。 ②販売面 ・日々の出荷、販売実習等で、POPや商品の見せ方等を工夫したことで、学生はお客様に手にとってもらえる商品づくりの意識が高まった。 【理解度アンケート】88%</p>	A		
	<p>(3) 鳥取県では、花き振興などのために、毎年「花のまつり（鳥取県花き振興協議会主催）」が開催されており、その中の花き品評会などで県内の生産者が技術研鑽を図っている。</p>	<p>(3) ・理解度アンケートで花のまつりに関する項目で、意識の向上が「できている」以上の評価が80%以上。</p>	<p>(3) 花き品評会 「花のまつり」の中で開催される鳥取県花き品評会に出品を行い、県内花き生産者の高い技術に接することで、意識向上を図る。 ・花き品評会への出品参加 1学生あたり1点以上 ・現地視察研修 2回 等</p>	<p>(3) 花き品評会 ・コロナ禍の影響で今年度の「鳥取県花き品評会」は中止となり、出品はできなかったが、学生は出品に向けて栽培管理を行ったことで、高い意識を持って取り組めた。 ・現地視察を3回実施した（9月2回、10月1回）結果、栽培技術向上の意識が高まった。 【理解度アンケート】1%（中止のため）</p>	-		
<p>2 「花育」を通じた知識・プレゼン能力等の向上</p>	<p>2 花きコースでは、学生の花への理解度を深めることと、幼児等に花を触れる機会の提供を目的に「花育」活動を実施している。</p>	<p>2 ・理解度アンケートで「花育」に関する項目で「できている」以上の評価が80%以上。</p>	<p>2 「花育」活動を行い、学生自身の花に対する知識等を深め、さらに活動を通じて、表現力等の向上に結びつける。 ・「花育」活動 1回 等</p>	<p>2 ・「花育」活動を2回実施した（10月1回、11月1回）。学生自ら企画・運営を行い、指導者としての責任を持って、花の知識習得に努め、相手に合わせた説明を心懸けた結果、花の理解度、表現力が高まった。また、園児等の姿から花の魅力を再認識した。 【理解度アンケート】80%</p>	A	<p>・効果の高い「花育」実施に向け、掲示物作成、花育方法について検討する</p>	
<p>3 GAPの取り組み</p>	<p>3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。</p>	<p>3 ・生産工程におけるリスク点検・改善1カ所以上（調整室等の整理等）</p>	<p>3 ・生産工程におけるリスク点検等について理解を深め、改善活動を実施する。</p>	<p>3 ・学生が中心となり、リスク点検を行い、調整室、資材庫等の整理を行った。次年度はGGAP認証取得に向かうこともあり、生産管理工程の見直し等について意識が高まってきている。</p>	A	<p>・GGAP認証取得に向け、再度リスク点検等に取り組む</p>	

<p>【作物】 1 水稲栽培基礎技術の向上と農業機械操作技術の習得</p>	<p>1 約半数が非農家出身であるため、水稲の基礎栽培技術を圃場管理を通じて習得する。</p> <p>水田作ではトラクター、田植機、コンバイン等の機械操作が必要であるが、操作未経験の学生がほとんどである。</p>	<p>1・理解度アンケートで水稲の栽培に関する評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。</p> <p>・理解度アンケートでトラクター、田植機、コンバインの操作に関する各評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。 ・耕耘技術競技の実施50分/10a以内が50%以上</p>	<p>1 各学生には圃場1筆を責任をもって管理させ水稲栽培技術の習得を図る。特に2年生は、プロジェクト学習等により星空舞等の新品種やスマート農業、低コスト栽培技術など現地で必要とされている新技術の習得を図る。また、新技術に関しては、ゼミや先進農家視察を行い知見を習得していく。</p> <p>学生の機械操作技術習得を図るためには、実習量を多くする必要がある。そのため、農大の管理ほ場面積を維持しつつ、近隣農家から機械作業実習ほ場の提供を受け、水田での作業面積を確保する。また、トラクターでの耕耘技術競技を実施し、技能向上を図る。</p>	<p>1 各学生は担当圃場を責任をもって管理することができた。プロジェクト学習について学習し、課題解決の手法を学ぶことができた。 ・スマート農業については、関係機関が開催する研修等に参加し、知見や技術の習得を図った。 【水稲栽培理解度】100%</p> <p>・近隣農家からの圃場提供による実習作業はコロナ禍で対応できなかったため、農大の実習田を中心に作業の研鑽を図った。 【機械操作理解度】80%</p> <p>トラクタ耕耘技術競技については2月下旬～3月にかけて実施予定。</p>	<p>A</p> <p>B</p>	<p>・スマート農業は導入農家の見学や研修会等を通じて技術習得を図る。また、圃場管理や水管理システムについては本校で、技術の検討を行う。</p> <p>・作業実習において、圃場ごとに作業方法等を自ら考える力をつける。</p>	
<p>2 有機栽培技術の習得</p>	<p>2 有機栽培に漠然とした興味を持って入学する学生が多いが、具体的な栽培管理は未経験である。</p>	<p>2 理解度アンケートでの有機栽培技術に関する項目で「できる」以上の評価が80%以上。</p>	<p>2 有機栽培、特別栽培導入のほ場を設置し、栽培技術の習得及びメリット、デメリットの理解を図る。また、現地栽培農家へ視察し技術の習得を図る。</p>	<p>2 有機栽培圃場を設置し、栽培技術の習得を図った。プロジェクト学習でも取り組み、メリットデメリットを把握することができた。 ・有機栽培農家、農業試験場への視察研修で栽培技術、知識の習得が図られた。 【有機栽培理解度】100%</p>	<p>A</p>	<p>有機特別栽培に意欲がある学生がいるため、継続して雑草対策を中心にプロジェクト活動等に対応予定。</p>	
<p>3 白ネギ、ブロッコリーの栽培技術習得</p>	<p>3 法人就農を目指す学生も多く、水田農業の複合経営で取り入れられることが多い白ネギ（秋冬）やブロッコリー（秋冬）の栽培技術の習得も必要。</p>	<p>3 理解度アンケートでの白ネギ、ブロッコリーの栽培に関する評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。</p>	<p>3 白ネギ（秋冬）、ブロッコリー（秋冬）を栽培し、技術の習得を図る。また、栽培している複合経営農家の視察を行っていく。</p>	<p>3 白ネギ、ブロッコリー等の栽培技術を一連の作業を経験して習得した。また、栽培前には研修会を実施した。白ネギでは播種後の管理、培土作業の重要性、ブロッコリーでは育苗管理の重要性が認識できた。視察については、コロナ禍で対応できず。 【栽培理解度】88%</p>	<p>A</p>	<p>きめ細かい観察とその方法等について、知識等を深めていく。</p>	
<p>4 GAPの取り組み</p>	<p>4 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得を通して、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。</p>	<p>4 理解度アンケートでのリスク点検及び改善箇所（危険箇所、置き場表示の改善等）1か所以上</p>	<p>4 講義で学んだGAPに関する手法を実習の中に取り入れ、リスク点検及び改善活動について、学生への意識定着を図る。</p>	<p>4 リスクの洗い出し等を行い共通認識を図った。調整作業では、リスク改善と効率性を考慮した配置等を検討し実施した。 物品の置き場所に着いて、表示を徹底した。</p>	<p>A</p>		

<p>【畜産】 1 家畜（牛）の飼養管理、繁殖生理に関する基本的知識を踏まえた管理技術の習得</p>	<p>1 畜産コースにおいて、学生12名のうち、農業高校以外の出身者が7名（58%）、また非農家出身学生が9名（75%）と、まずは牛に慣れ、基礎的な知識・技能を重点的に習得させることに力を入れる。</p>	<p>1・理解度アンケートにより、牛の発情行動、健康状態のチェックができる以上の評価80%以上を目指す。</p>	<p>1 牛の行動や採食量、便の状態などを継続的に観察させ、健康と異常をチェックできる目を養う。また、発情の発見率の向上など、生産性を上げながら健康に管理する方法を習得する。</p> <p>基礎知識を習得する目的で「畜産ゼミ」の充実を図る。また、繁殖生理を理解する目的で、子宮の解剖や超音波画像診断器による卵巢チェック等を行う。</p>	<p>・本年度「畜産ゼミ」を17回開催(前年15回)し、基礎知識の習得や技術の向上を図った。1年生に対しては子宮の解剖実習も行った。</p> <p>・牛の管理における「理解度アンケート」「できる」以上：7月56%⇒1月89% 基本的な牛舎作業、発情発見や異常牛の早期発見ができ、牛の観察能力が向上した。</p>	<p>A</p>	<p>畜産ゼミの回数が昨年を上回った。来年度も引き続き積極的に行いたい。</p>	
<p>2 家畜管理用機械及び飼料用作物関係機械の操作技術の習得</p>	<p>2 畜産関連業種又は農業法人が本学畜産コース学生に求める人材とは、家畜（牛）の基本的管理技術及び畜産の管理用機械（ホイールローダー等）、飼料用作物関係機械の操作技術を習得した人材である。</p>	<p>2・理解度アンケートにより、コンプリートミキサー、ホイールローダー、搾乳機械の操作が日常的にできる。ロールラッピングマシン、コーンハーベスター等の操作が1人でできる評価が80%以上。</p> <p>・大特・けん引以外の免許（小型車両系建設機械、フォークリフト等）について、将来的に必要な者の取得者割合100%</p>	<p>2・飼料の調製と給与、糞や敷料の搬出・運搬、堆肥乾燥機の操作、搾乳作業など日々の飼養管理により機械操作の習熟を図る。</p> <p>また、飼料用作物関係機械（堆肥及び肥料散布～収穫、調製作業）については体験実習を実施する。</p> <p>・就農・就職先での作業に対応できるよう、必要な免許を取得することを奨励する。</p> <p>・新1年生から「小型車両系建設機械運転業務特別教育」を計画的に受講させる。</p>	<p>5月：イタリアン牧草収穫 8月：夏草収穫 9月：トウモロコシ収穫、イタリアン播種作業</p> <p>・学生が中心となり、牧草ラッピングマシン、ホイールローダー、大型トラクター等の農業機械の操作を習熟した。</p> <p>・機械操作における「理解度アンケート」「できる」以上：7月67%⇒1月89%</p> <p>本年度技能講習等受講歴</p> <p>・小型車両系建設機械運転業務特別教育受講（学生7名） ⇒将来的に必要な者の取得者割合100% 実技は農大で行ったため、通常講義と実技で2万円かかるところ1万円と学生の経費負担を軽減につながった。</p> <p>・車両系建設機械運転技能講習（職員1名） ・フォークリフト運転技能講習（学生1名） ・玉掛け（学生1名） ・狩猟免許（学生1名）</p>	<p>A</p>	<p>・次年度も農業機械を操作する機会を積極的に作りたい。同時に安全運転に対する意識付けを行う。</p> <p>・次年度も引き続き、小型車両系建設機械運転業務特別教育の実技部門を本校で行う。また、畜産コース以外の学生にも広げようと考えている。</p>	
<p>3 牛の繁養、誘導技術の習得</p>	<p>3 乳牛及び和牛共進会に積極的に参加を行い、牛の誘導技術の習得を行っている。</p> <p>【第12回全国和牛能力共進会】令和4年10月に鹿児島県で開催される本大会に倉吉農業高校と連携して出品することが決まり、既に受精卵の確保を開始している。今年度は、計画的交配と全共で実際に牛を引く学生の確保が必須（R3年度入学生がR4年度に大会に出場する）。</p>	<p>3 各共進会への出品 6月：中部酪農祭 7月：中部畜産共進会 9月：県畜産共進会</p>	<p>3 共進会に参加をすることで飼養管理技術の習熟と育種改良の面の充実を図る。</p> <p>【第12回全国和牛能力共進会】計画的交配を行いながら学生の確保を行う。倉吉農業高校と連携を強化する目的で、牛の繁殖技術や飼養管理技術等の出前講座等を計画する。</p>	<p>新型コロナの影響で殆どの共進会が中止となり、出場する機会がなかった。</p> <p>第12回全共の特別区（農大及び農高区）に高大連携で出場するために、受精卵移植等の技術を使い、農大9頭、農高3頭農の牛が妊娠し、出場をほぼ確実なものとした。当初の妊娠目標が8頭に対し12頭が妊娠。学生が受精卵の採卵や移植に立ち合うことにより、最先端のバイテク技術を深く理解することが出来た。</p>	<p>A</p>	<p>令和3年は、3月から出品予定牛が次々と生まれてくる。高大連携を密にして、子牛の哺育・育成や調教まで学生が中心となって向わせたい。</p>	
<p>4 GAPの取り組み</p>	<p>4 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要が</p>	<p>4 牛舎内や牛舎周辺の環境整備や資材整理の徹底</p>	<p>4 生産工程におけるリスク点検等について理解を深め、可能な取り組みから改善活動を実施する。特に、整理整頓清掃（3S）に重点を置く。また、各種作業手順書を作成する。</p>	<p>・飼料倉庫のネズミ対策や薬品庫やわら庫の清掃を行ったが、積極的とは言いがたかった。</p>	<p>C</p>	<p>・令和5年のG-GAP認証に向けて本年度から計画的に整理整頓を行う。 ・各種作業のマニュアル化を行う。</p>	

7	多様な研修制度の運用と研修生のニーズに即した就農支援の実施	1 関係機関との連携による進路調整	1 アグリチャレンジ科は、農業に関する基礎訓練として定着しつつあり、各機関の就農相談においても、農業未経験者に第一に促す研修として浸透してきた。今後は、雇用拡大により経営発展を目指す経営体の育成とあわせた制度運用をさらに意識し、引き続き市町村、普及所、JA、担い手育成機構等関係機関との意識統一と情報共有を図り、研修生の進路調整を進めていくことが必要。		1 雇用就農意向の研修生の就職に向けて、研修調整員による研修生情報および雇用可能な経営力を有する経営体情報について関係機関と共有することに一層努める。	1 ・アグリチャレンジ科修了生31名のうち、84%が就農した。 雇用就農17名、自営就農2名、親元就農4名、研修後就農予定3名。 ・研修生の進路意向を関係機関と情報共有し、雇用先を連携して探すことで、雇用就農率が前年より22ポイント増。	A		
		2 新規研修の周知	2 白ねぎ、ブロッコリー、ミニトマト、スイカの野菜主要4品目に限定し、就農品目の栽培管理基礎を習得するために創設した4ヶ月間の短期スキルアップ研修(年5回開講)を幅広く周知し、受講者の確保が必要。	2 ・新規研修(スキルアップ研修のうち短期研修)の確保	2 各種機会を活用し関係機関への再周知を図り、就農相談時に適切に提示していたできるようにする。また、JA・市町村の協力を仰ぎ、募集時期をとらえた各広報誌への記事掲載を行っていく。	2 ・県・市町村の広報誌や新聞へのお知らせ掲載、市町村、JA等関係機関と連携した就農相談者への研修紹介を実施した。 ・短期研修受講者 白ねぎ3名、ミニトマト1名。	A	・継続した就農相談者への紹介や県、市町村、JA等の広報誌や新聞へのお知らせ掲載を活用し、研修生募集について広く情報発信していく。	
		3 新規就農の優良事例発信	3 本校研修を経て独立自営就農した方、アグリチャレンジ科受講をきっかけに雇用就農に至った方等、近年で様々かつ優良な就農事例が生まれている。今後就農を検討する方に対し、これら事例の情報提供は有効であるが、従前積極的に行えていなかったのが実状。	3 ・HPを活用した研修修了生就農事例の追加	3 HPでの情報発信を行う(印刷物として事例集を作成よりも発信が早い。就農相談対応時に必要な事例を提示することも可能。)	3 ・HPに研修修了生の就農事例を1名掲載。 ・追加掲載に向け、修了生1名について記載内容等を確認中。	C	・就農事例の記事作成を継続し、掲載数増に取り組む。	
		4 (GAP関連) 研修拠点施設の適正管理	4 農業学習館は、スキルアップ研修野菜専攻の拠点施設であり、栽培管理に係る資材・小農具・出荷資材・各種工具などを保管するとともに、毎日出荷調整作業を行う場所として活用している。日々の整理整頓の徹底について、自営開始を志す研修生に意識付けしていくことが重要。	4 ・誰にでもわかる収納への改善と表示の徹底化	4 改めて、農業学習館内の点検を研修生とともにし、作業性を考慮した物品の配置と、わかりやすい収納のための表示を徹底する。	4 ・出荷調整時の異物混入等のリスクを研修生と再点検し、道具類の整理整頓を心掛けた。 ・また、白ねぎ皮むき機の作業時の負荷を減らすための作業台の見直しや効率性を考慮した配置等を就農時に実践できるように研修生と検討し、改善に取り組んだ。	A		